

万載狂歌集上

山本 嘉弘

5 6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8 9



さきと本は本と多くしうれをかの柱の敷より
あけーといへともいふくまのこゆる集のこはて
世の中のこあまのくあうへるこいひあうさり
されハハきこのあびもぐうともいふを
いさちのつこどんともいふぬうこき清代よあひ
てあうあふそのけ風うらう古今夷曲は撰
夷曲の二つの集をあうこまはるのあうこ
あひけ風あくとあうこああうけと花をよ
幕をとるのあこ月をよ隣をいあきのゆあ
およあうる出待をうううのよ人のよ

おのうーういつけあけるをうーつひは歡樂と
うく哀情とあうこちとけよのこくあめ
ふこくまうーこまもえきせーこいふ
今のま別あうのう治大あうんのあう
いあひーまひーうを祭よあうとあうさうれ
といつーうあひせめちあめあまねうなるさう
せよあまううーいひのあういさうさう
この集あよのせとさうやうまめさうぬ乃まわい
そのまうりよまふさうりああみのあて
さういふるとしてる載さううあめとあう

これ江戸まへのひらちのやーいーよの春をさるひ
さうや天明みつろくーさるの日のうぐくも
あーい路きるよあんありろ

朱楽菱江

萬載狂歌集卷第一

春歌上



さるもろくろ目よあ

貞徳

さる娘のまを吹ひーやろふけーささろくろ目さる春風

あけら菱江

梓姫乃ろくろ目けつひのまをさるさるさるやろくろ目

さるのろくろ目

四方赤良

くれけの世の人あふおろくろ目やろけさるを春はさるより

寅のろくろ目のまろくろ目

無つ東作

東風吹く今年も首とある法師よりこのまろくろ目の春をさるへ

扇賣

奥政

妻は今おあましくとふいそてねとけよの枝うませ

らうゝ画ゝるお子ねこのうふ 細井翁

さうふうてはのちせとそむくふた有りもあへる藤三まな

少むをあのちねつゝとそむて 四方赤良

そこの子のひとふてこゝろさうせよ免街ふいつうおん娘子

草薙むそいゝとゝ万葉のこゝろさうとそむて

わとのとそむて

万葉ふれいゝとゝそむてさうゝきされいゝのねねうね

浦多千綱

浦多千綱

万葉うゝとゝそむてさうゝきされいゝのねねうね

追

乙部令吉

さみちん乃あふれいゝの一声いゝつゝ乃誰を呼子と追

歌合の中より彦

布田田造 和州郡山
他田正武

はけふもさうとちある春の思きんうあふむハ程そむて

子日

四方赤良

子の日はさうそふ小松の大徳ハ今も賢者のこゝろを引

あけらまは

うゝいゝとゝあまの娘小松いゝとゝはの日のまのれ紙

定

紀定丸

雪も多しこれ日の雪も多しふりあけ雪とらうに鳴
餌もうけをふ雪の多しとらわらう年々をわまひ

百首歌の中より 雄長老

うりふさる雪とらうに雪の多しとらわらう年々をわまひ
七種乃白所とらうに雪の多しとらわらう年々をわまひ

雪の多しとらわらう年々をわまひ
雪の多しとらわらう年々をわまひ

雪の多しとらわらう年々をわまひ

雪の多しとらわらう年々をわまひ
雪の多しとらわらう年々をわまひ

百首歌の中より 残雪 如竹

雪の多しとらわらう年々をわまひ

雪の多しとらわらう年々をわまひ

雪の多しとらわらう年々をわまひ

雪の多しとらわらう年々をわまひ

雪の多しとらわらう年々をわまひ

雪の多しとらわらう年々をわまひ

雪の多しとらわらう年々をわまひ

雪の多しとらわらう年々をわまひ

雪の多しとらわらう年々をわまひ

山家梅

とこの本阿に

とひきみいとうちううておひよるあけり梅の枝のかり垣
山手白人乃ちとてまつりくふ常陸より移り
けりー梅のうへ根つきいふうーときこて

魚沼東記

少き傍より根うて梅ー梅あれうてつふさやまきひ山

とこー

山手白人

梅のこあのもひのもととあまふとやふみ出と當世と作
ある人のりてあ梅のさなふまうりうううかきと
もつーやうてはらうちうて あけら菱江

目のあでもつーさやいぬをまひやうあきれ梅のさき

ふすや家のさき梅の花とさき

杵菴

我年もはふ十羅万乃さきうり久き梅花ふ易

花うふいけり梅枝と

ト巻

やう梅をこころのつさきうけとあて花の令はせとこれ

柳

栗梢

宝川の縄あうあふさ風とさうとをいといふとさき柳

志月菴素庭

馬髻れさき柳もさきの眉とつーてさきもゆり

けつーけれ柳

かこのああこ

まふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつる

奴紙書

星金次

奴たこやうあつたのまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつる

廿四正月

かゝるあつた

よりあつたこやうあつたこやうあつたこやうあつたこやうあつた

母持

田舎のまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつる

紀のこやう

吸つてまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつる

石部金次

まふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつる

まふく

鬼窟採痛

のまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつる

まふく

まふく

まふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつる

百首あの中まふく

猫頭

やうまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつる

まふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつる

まふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつる

まふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつるまふくけつる

初年追

ちう年ハむつきのちうふやちうーちうや憾のちうけえん

初年のこよみねさうねハ

浦邊干涸

初年のちの出まぬハ何のばちうーくを鞍のおのうん

西行忌

藤津初美顔

ちう月のちあふてきささふちうふささる富士見西行

乙保女

ひまくと世とのれうきささふちうふける佐々憲彦

春詠中

かべの中塗

ちう風ハちやち中もいふぬはちうのあふちうささふん

萬載狂歌集卷第二

春歌下

花

ちう夜橘海

ちう瓜ちうちうささう花ちうちうのちう年ちうさ

漁産

ちうささちうあふちう人のちうあふちうささう花のちうひる

未得

ちうちうあふちうあふちう花のちうささちうのちうさ

佐々百首ちうの中ハ

物さ明浦

花のちう天狗様ちうちうちうてちうちうちうと笑ふちうちう

百首歌の中へ様

貞徳

花よりも春風子とやふらん春風の奥ふあさる山姥

様様

かゝるあて

いふかきさやうあまれあさる白きあふれさる

まの白に戸をぬきて

二葉判書集

ふき一きみてふさひは様阿まきふさの江戸をぬき

まふ人見花

長き

水金まのまふ人はいふあれや花をぬきたふあふれ

燕子

奥ふあ老ひきあふれは花は花幕より外へ女中あふ

ト者見花

かゝる様

ふらふふまの雨風れけはあふまふや春風れうくや華

花よりも様と花は花より人をとて

坡柳

あれはの軒よりやちふらん様と花の春のまふ

まふ人

まふあふ

まふれ花よりやちふらん入おの鐘よりやまふ

かゝるあて

中の所はあふさるううう様と花はあふれ大なる

花よりも

ちゝの肉子

あまのこころ籠せられまゝに花れやうふとひくまゝ

惜花

四乃赤い

咲たれうづ根付の琥珀のしあうてあけの産とや

流花

かゝ衣襟酒

まつりゝ遠いハ花のきく歌十二しとや七さくはそ花

曲の宴

四乃赤い

あれうづ趣向するせうねねハ何の曲あるか

軽女あしん

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ

あまのこころ

さうきもさうきもあまのこころあまのこころ

寄花出立

鳥咄

去年まで桜といひお花のたけいら縋子のきく出立の

沼上熟時

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ

帰居

山手白人

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ

北山

ふふふー花の梢にいつい通る花の影の光にやまを

燕

とゆふ女

はるの朝霞うつらとくへまてうらるゝはるの朝霞

あら若に

おのゝ葉よとあるおのあけぬらうはるやふねやうち

雪若

雪若若に

舞い雪若葉のそをうもふなてかよふもさくあはれ

雪月

いふ白人

まねおのあんのこふまう月の影におほらまんちう

世の中百首あの中ふ

世の中百首あの中ふ

まねおのあんのこふまう月の影におほらまんちう

まねおのあんのこふまう月の影におほらまんちう

まねおのあんのこふまう月の影におほらまんちう

春雨

春雨

商賣もおの葉とてうきけはねとてうきけはねとて

百首あの中ふまね

如竹

まねおのあんのこふまう月の影におほらまんちう

まねおのあんのこふまう月の影におほらまんちう

まねおのあんのこふまう月の影におほらまんちう

まねおのあんのこふまう月の影におほらまんちう

あけらば

ちれくとちのりまーいさうさうさうのつるまき

石首翁の中は

布留田造

あらこのもろいさな侍投る誠のまじり

別荘まじりとをゆくさうさうさあま

さうてん酔こころふあまのいづれ

ちてあひるおーもさうさうさすのま

きこ

かろやあま

さうさうさうさうさうさうさうさう

石首翁の中は

めけ

さうさうさうさうさうさうさうさう

ふふふふふふ

布留田造

かろのさうさうさうさうさうさう

さうさう

ふふふふふふふふふふふふふふ

蹴鞠

ふふふ

やろくろくろくろくろくろくろく

ふふふ

布留田造

おのふふふふふふふふふふふふ

おのふふふふふふふふふふふふ

五五八

秋多あふふ尺場のさうりあふうくともあふうの花

秋庭百首分の中は秋多

アキハ赤ら

七魚八魚へさる井もれ山吹のあひついであふれ

新しうぬれあふさうゆき

同じく雲集

ふあふさうさうへんきくはた秋のここののあふれ

あふ人のあふのうらふあふのあふのあふの

ちあふさうあふさう

あけらあふ

あふさくあふさくあふさくあふさくあふさく

あふさくあふさく

萬載狂歌集巻第三

夏歌

百酒狂歌の中は首五

曉月夜

まられーまのふの酒のさくうらうあふさうあふさく

百首分の中は首五

安井了忠

あふ人の質さうさうあふさくあふさくあふさく

あふの中は

あふのあふ

あふのあふさくあふさくあふさくあふさくあふさく

あふの人

あふのあふさくあふさくあふさくあふさくあふさく

比叅百首の中

お子明捕

うさぎもいさぎもきつねもうさぎのなをわらうてはのびる

牡丹

魚屋のあはれ

うさぎもいさぎもきつねもうさぎのなをわらうてはのびる

新樹文作

子子孫孫

うさぎもいさぎもきつねもうさぎのなをわらうてはのびる

弁花

山白人

うさぎもいさぎもきつねもうさぎのなをわらうてはのびる

風百首の中

かみゆき

山賊もあはれうさぎのなをわらうてはのびる

郭公

業指

うさぎもいさぎもきつねもうさぎのなをわらうてはのびる

かみゆき

うさぎもいさぎもきつねもうさぎのなをわらうてはのびる

あなを

あなを

うさぎもいさぎもきつねもうさぎのなをわらうてはのびる

あなを

うさぎもいさぎもきつねもうさぎのなをわらうてはのびる

あなを

あなを

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

三浦うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

うけつけい月もさびやの中をよきえんもきぬさう郎公

浮城のほう

卯中

本條より一紙のき紙のちうこふや浮城のあひけあら

拍録

山崎白人

あつちやこのふまにし拍ちうらちりてふうたふたふ

タつてふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふ

夕月おはるふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふ

一せふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふ

好来万國校

あつちやふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

雄老

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふ

かくはん坊目録

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

魚つて飛

つり神も秋とくくく漢のや苗れをまのりて有雨

梅干満延

細谷麻子

庭ちやま白山らのそみちてそよそよとこれ梅干

人のうらうら花子胡瓜とおれれとてい

軽サあらん

世ふちてきくふきやうのおうちかくけちちのやこのち

隣り鶯

隣海法師

このまゝ隣のもとのはあれとてとてきけは又ふひま

五月

山の白人

まづきと月よりさびやけてまゝ碎あうあうと一様

紅唇る首あの中は明夜ま 四方赤良

今ねふらうとていひあきていふはさるる花

お今れ中よとて

平郡安樹

螢火もおうとていふとてあれまゝあまうとれ入あり

卯や

螢火と窓よあつてあつてハ川もこのそれをれ信者

脩元主

夜軍と居のつり火やとてあつてまゝつて堂合戦

紅唇る首あの中は蚊火

いふあふ

ちりきりのやうなうらなひにうらなひとあつたうらなひ

野一うら

ふふふ燕

蚊と蚤とあつた腹をせうらけておかしきうらなひとあつた

雪郎

古あつたうらなひとあつたうらなひとあつたうらなひ

ふふふ中ふ氷室

平部実樹

うらなひとあつたうらなひとあつたうらなひ

雪郎

ちりきりのやうなうらなひにうらなひとあつたうらなひ

夕三

子子孫孫

ちりきりのやうなうらなひにうらなひとあつたうらなひ

丹三

無名氏

ちりきりのやうなうらなひにうらなひとあつたうらなひ

丹三

無名氏

ちりきりのやうなうらなひにうらなひとあつたうらなひ

丹三

ちりきりのやうなうらなひにうらなひとあつたうらなひ

丹三

無名氏

ちりきりのやうなうらなひにうらなひとあつたうらなひ

丹三

無名氏

ゆるり式部くちやあつらんむらよりこのあのかき

振とる

蛙面

出せく振とるのさあつきのあつらんむらよりこのあ

細涼

玉簪小

さゆり又涼のさゆりんすみてはあふらんむらより

お國信くすゑとる

魚つと

やゆりく蠟燭の今やいあ一夜とるあつらんむらより

芝浦納涼

さゆりのさゆり浦のさゆりくすゑとるあつらんむらより

ねえり細涼

物語のさゆり

さゆりくあつこのさゆりのさゆりくすゑとるあつらんむらより

こ又納涼

物語のさゆり

さゆりくあつこのさゆりのさゆりくすゑとるあつらんむらより

伊豆のさゆり

さゆりのさゆり

丹後とあつこのさゆりのさゆりくすゑとるあつらんむらより

さゆりくあつこのさゆりのさゆりくすゑとるあつらんむらより

さゆり

あつこのさゆり

さゆりくあつこのさゆりのさゆりくすゑとるあつらんむらより

さゆり

萬載狂歌集卷第四

秋分上

三秋

未得

まあふとや吹さむる秋風こころのそよとけあは

よみ人

山残のともりのまよふまきけてけふあらしく秋の初風

マ露法師

やうとふ秋も秋のころうひさちうへにわかれあは

初秋郭公のちくとまき

大根をよ

ちとまきハナもあまうてやうみななふとけりて

せむね強者

弁中

とて強くともふもあつたを秋といふ仕切場

七夕

あや中じ

年より交あひあはれてある秋といふときより今

うき人

ふあふれはかひのまじりて秋といふ今

質を七夕

智恵ゆき

あらうまひりあひのかし仲天の河ふ末はあふ

七夕

麻酔ゆき

ふあふれはかひのまじりて秋といふ今

七夕酒

馬蹄

けんぼりて指とあり指のつるさひとらふに

七夕瓜

かき橘海

いつの世よりこの世にあらはる瓜うまきとこれ名はあら

七夕素麺

智恵ゆき

あふのありあはけゆへ天の川あふりてあふ

七夕乃秋強者のつるさひ

栗山

あふのありあはけゆへ天の川あふりてあふ

あふのありあはけゆへ天の川あふりてあふ

筆松風

あふのありあはけゆへ天の川あふりてあふ

五葉草

四寸赤い

うけをうらちかくとふらうとて人よあよのうらとあまうね
みゆすこいふとのあうとせうよあはれあはれ

あけら菱の

うけをうらちかくとふらうとて人よあよのうらとあまうね

五葉草

二葉園立路

うけをうらちかくとふらうとて人よあよのうらとあまうね

中え

坂上竹藪

うけをうらちかくとふらうとて人よあよのうらとあまうね

新嘉坡の燈籠

うけをうらちかくとふらうとて人よあよのうらとあまうね

萩

山手白人

うけをうらちかくとふらうとて人よあよのうらとあまうね

お合の中よ萩

お都実村

うけをうらちかくとふらうとて人よあよのうらとあまうね

富路の萩眼寺よ萩とて人よあよのうらとあまうね

あけら菱の

うけをうらちかくとふらうとて人よあよのうらとあまうね

お合の中よ萩

うけをうらちかくとふらうとて人よあよのうらとあまうね

るふふきこへ越後のあゝ海ふ波のうらとてあけ

き

あは

んこもてふふいれそやまのまゝんやとてまよきと

ふ合の中ふ

平郡実樹

ぬふふ風の吹くはのせひげやまゝのまゝとて

百酒ね歌の中ふ虫

唯月翁

さうつふいりてゆきさうくひれよとてさうとてあは

百首ね歌の中ふ

松野

はるふふとてふふのあけふとてふふとてふふとて

ふふあは

秋のあけふもまゝとてふふとてふふとてふふとて

即〜に

通小級息人 市藏

ふふとてふふとてふふとてふふとてふふとて

質をす麻

船麻豆起

ふふのあけふもまゝとてふふとてふふとてふふとて

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

紀世翁捕

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

萬載狂歌集卷第ニ

秋歌下

月

貞徳

月ゆへにけ世ふたきまなちの中へふえんとて

ちるる百首集の中へ

四万赤い

くもりちるる世の中へちるる月

三日月

書屋鬼子

天の戸もよれちるるのあれどとて

橘貞風

ちるるの月紗のけちるる月

ちつき十一日のお月とあそびて 燕斜

きんこちうがとひてみえた十郎ふりんとあそぶ月の面影

八月十三夜月 あけら菰江

ちあ出事ぬらんやの月とあそびぬ秋のちあはくあそび

十夜夜月 赤月菰素庵

くろくといんまあちとらうまきとてあそびぬ

十夜夜月 濱色主人

くひくわうはさきまうに唐大和とていひくのちあ月の影

山手白人

桂芳ハトキウ上戸とあつよのおとらとてあそぶ月の影

落波根岑依

名月のおととあそびてあそびてあそびてあそびてあそびて

とあそび

お月さあといつとあそびハ十夜とあそびてあそびてあそびて

十夜夜月 ちあのおい

名月の雲とあそびてあそびてあそびてあそびてあそびて

十夜夜月 燕斜

あそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

秋人

あそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそびあそび

十六夜月

月方赤ら

夕方のまじいとき時やうく一畝をのりよる月

十七夜月

あきらま

ゆきとあらやうなれおふあゝの腰よさうらけの月

燕斜

君合腰くしまやういさのいふれとるにうまの月

十八夜月

今がーいまちくいまいさふさふをうをえの月

志月菴素色

うらうらくは君はの月け天り酒やうらうけとむ

十九夜月

秋人

とふかつやうくはおのきき切ハ桂男よのくさう

おと月のかう

燕斜

月とむらうらめ酒やうらうくくは肉も福きん

志月菴素色

かゝるもちきいのかうくやうと月おききしや

と田のき場と月をけう

と保

月とらうおのつうくやあをのつうくあま田のをとあら

はるあきら田のき場とくすあうりすお

まておのなうく

卯雲

園子水中新月のまゝあらうとていづこに星あり
智恵ゆき

名もく田をうへまの月とておれいづのあつちや
卯雲

ひらきさうさうと生餅はなうまや月もろくし
から衣襦袢

なを海下戸と上戸の顔はまきやあはれ坂もあう
いづれ赤ら

芝浦の漁人ゝ網をうへま月をいづと鰯をいづ
かこれ本阿と

多指見月

いけこれあてゝおもて月今宵もろくさるる月
いづれ赤ら

月お風

砕き月のむしつきれ様さるる風のうへまひとえお
出東秋万作

月お眼鏡

月うけとうつとくひのむしだひおの波よりていづれ
峯松風

月お基

月をうへまのうへまをうへまていづの盤のさやうと
いづれ赤ら

月お三味線

さみちのゆきねまふ月をいづとあていづれ赤ら
いづれ赤ら

月お速信

いづれ赤ら

世の中ハいつも月おとまれ飯さくまてまてかひのりま

十二夜月

粟山

つくとくねいといやうな月のおとまれある十二夜月

美田中

月おとれ新うらうらう亭さるハせうて十二夜月

四石赤

十二夜月おとれ一そとれ月のおとれの雪から

十二夜月から衣襟海のリとて謡十二夜月と

とて月のあうとて時を流と 魚は、赤

十二夜月とていさあ十二夜月ふきまは雪のいのち

おとれ十二夜月

まじりつとていさあ今宵の月おとれ

おとれ十二夜月

いさあやいさあおとれいさあおとれいさあ月おとれ

おとれ十二夜月

四石赤

あれといさあおとれいさあおとれいさあ月おとれ

十二夜月酔月樓と二人の白拍子のとていさあ

いさあといさあいさあいさあいさあいさあ

いさあいさあ

十日あつたといさあいさあいさあいさあいさあ

秋丹野

地号有武

さあさけさけの堂秋さけり月よりおまひりるは

大坂をび女

秋の丹のさけ風をさけりてさきもあけりや秋さけりる

厚

樋口関月

かり合りのさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

厚連山

濱をさき人

天はさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

初鮭

卯雪

初鮭の一尺さきりて二尺さきりて三尺さきりて四尺さきりて

新酒

新のさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

新酒

濱をさき人

さきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

奇合の中は橋衣

布留田造

さきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

さきさき

豊店鬼子

秋さきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

野

山白人

百八のさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

勢あまのやいさる人のうらうらふ
うらうらふ

馬蹄

あまのやいさるのうらうらふうらうらふ
あまのやいさる

平郡実樹

あまのやいさるのうらうらふうらうらふ
あまのやいさる

未得

あまのやいさるのうらうらふうらうらふ
あまのやいさる

勝定

あまのやいさるのうらうらふうらうらふ
あまのやいさる

歌大菊

江戸赤松

大菊とあまのやいさるのうらうらふうらうらふ
あまのやいさる

吉原菊

奉政呂西

あまのやいさるのうらうらふうらうらふ
あまのやいさる

おこの明浦

あまのやいさるのうらうらふうらうらふ
あまのやいさる

平郡実樹

あまのやいさるのうらうらふうらうらふ
あまのやいさる

未得

あまのやいさるのうらうらふうらうらふ
あまのやいさる

〇二二

時今さらきとや紅葉のまゝいあゝとてきん

りふれりふれ

弘治而首のち

字乃希之

赤

山中人

秋のやふ一里芝一町宮の御多幸

冬歌

雄長老

火桶

卯中

經曰

冬の果ての果て——とらふれはとらふもちんをちん

上人

龍田作
せうらけやあうあん
あうとふたれあうと
あうと

うぐい百首の中より

四方赤ら

昔の中より雨のやうに定祇つてゐるれうれう

その他にいけなさとてはうて

志月菴素庵

ううう又このねにけりりようきもけりりき床のき仙

及檜尾素

へはく東作

何それ橋のうういよかんを月かんをからくあるあれええ

谷中尾素

池杜氏祈り

ううくとらのはのきをううあき風や上野のきまけき

お合れ中よりまね

平郡さき身

きあきまねの本よりいせきのほねのきとあられまね

さう町あきや町二のきえきとてはうて

卯雲

ううとて二丁まらうの人より人さいてううあきやうて

ううとてのあきまきううて

柏延

きあきまねのううたきとてきあきあきううてきあきあき

きあき

あき

山人ハ冬をいりてきううてあきあききあきあき

お合の中よりき

平郡素あき

きあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

お合れ中よりき

布多田造

とけりてけりてけりてのつるき羽よりねとする野のま音
みきき

かゝる橋海

地とてけりてけりてのつるき羽よりねとする野のま音

百首分のゆゑに雷散

如行

あはれまされまされまされまされまされまされまされ
まされまされまされまされまされまされまされまされ

一之

あはれまされまされまされまされまされまされまされ

おや

おや

のらりてけりてけりてのつるき羽よりねとする野のま音

まき橋や

あけらるる

あはれまされまされまされまされまされまされまされ

あはれまされ

あはれまされまされまされまされまされまされまされ

あはれまされ

あはれまされ

あはれまされまされまされまされまされまされまされ

あはれまされまされまされまされまされまされまされ

あはれまされまされまされまされまされまされまされ

あはれまされまされまされまされまされまされまされ

あはれまされまされまされまされまされまされまされ

我座の枝のさうをさのさにはまきまきくまをわさう封
ちささのまは座のさささささささささささささささ
うさささささささささささささささささささささ

山崎

おき人ーに

とねえとさささささのゆへ年とさねさくささささささ
あけらささ

卯

才代はさつーさささささささささささささささささ
年とさねさく

遠海法師

書中へおのつさささねさ一おささささささささささ
から右橋海

書菴鬼

ゆへ年のささささささささささささささささささ
蛙面

婆

まの春のささ一お乃千金とささささささささささ
借浅の山崎さささささささささささささささささ

よき人へ

ひんがしれががた才もあうまなれぬ年れれれ

筆ね風

うらうのふれもつとふれあふふあう一帯き年れれれ

四方赤良

新うくいふう形とらふれれとらふれ年れお国ふ

を百人一首の中ふ

不自由抄

はかりあうさうもの質と金とあられさうはきいさう

俳師集

へはるあは

はかりあう俳十年とらふ俳師あは地盤新あをえま新

午の年のれれ

好京ま同彼

老うの里ま迎つてやまの年のあういむれれ

とらのれれ百人一首あまうくくあうい

うるとま

唐衣橘海

ふらぬいつのうらううううあ借銭の山あう

あや六あううう年のれれ

平秩東作

七八もこのあまうう年れれあうあうあうあうあ

とらのれれ石所あう師のあうあうあうあう

し時

新あうくくあうあうあうあうあうあうあうあうあ

刀辨治の辰と申すときとてふみとつりし

何ぞ赤ら

のうらぐい又きくもかこみ辨治らいあうと梅どくま
卯月の比へは東化くくびくもる時梅桜松のきと
あつるも

最明寺ときあふなをれ辨のきとやせむまのきまじ
かよのちあくらゑのゆきまぬつれくはの清
くぬくのきあふまうりる時 へつと東化
見てかつれくづるがくを辨のうい山ひてうつきのゆ
張あつて清くくけてまぬつれきとひき谷路があらぬ

三つの宿よとまりけり比あふ人狼のふき
所あふとてあうりく馬路のねく時ら
くらいでまうけとる標の山とこふゆ
けうりあひあうくちをう人くふおるも
出まう山かこし所あふけくくあふ
あうあうりるわ

浮衆菴巻の

毛蒲束と名張とくくとひく山中まうく送う狼
井き月の比か解のあまうりる人とおく
軽サあらん

あふさうかひる辨の神くもあふ小春の梅か解級

やうなものを、あふくといふが、ちよの
かゝるものさ

ちよのゆき

とらどのもうおきしきいにくふくうふあくの十八
三井の案をよかつる時 へつ東作

三井の案をとりし時へつて東作

富士よりとちう往く如き龍のちひなり長者のこゝのまきも
うきと

波はかづるべき日もちづきぬるは
 碎月棲きて
 人々むまのともむけしぬれ

人々むまのちむけくぬえ

田中玄起 竹本住大夫

牛込のおもき惣をやるふおひううおふうとゆ々片袖

萬載狂歌集卷第八

羈旅歆

百首文の中へ

猶輕

以れぬ病を多し是非ともあけをみて張の衣を

天龍川

梅仙法師

天龍やきやぐりの雨のふり時ハせんくらまごくらともめいふく

さやの中を

卯

とを又二海一と云ひきや所用ありうすとの中

塙のふり雪ふり

小園明

堀のふさふさもりもりかきいせうそくふるさうちり

はるかのふさらの宿より

お秩東作

浮きあがりし旅路もついでとてとまのふゆふ旅

夏沢より

栗山

旅人とまのふかりて夏沢のむきとむきとむきとむきと

十とむきとむきとついでとてとまのふゆふ旅

ふゆふ

かみちい

芋とむきとむきとむきとむきとむきとむきとむきと

九月九日とむきとむきとむきとむきとむきとむきと

さうとむきとむきとむきとむきとむきとむきと

さうとむきとむきとむきとむきとむきとむきとむきと

はるかのふさらの宿より

お秩東作

栗山

浮きあがりし旅路もついでとてとまのふゆふ旅

夏沢より

栗山

旅人とまのふかりて夏沢のむきとむきとむきとむきと

十とむきとむきとついでとてとまのふゆふ旅

ふゆふ

かみちい

芋とむきとむきとむきとむきとむきとむきとむきと

九月九日とむきとむきとむきとむきとむきとむきと

さうとむきとむきとむきとむきとむきとむきと

さうとむきとむきとむきとむきとむきとむきとむきと

張省巨燁

所杖为轻

森羅萬象

あふとく 篠森のやとをおきこつたの二里もあとのどろどろ
畑地あぜ

畑
疋
あ
せ
乃

後つゆやそめて祈りおきこころをきかんとけ川の若
あづなは侍りる比すところのちとまのさと
いふところを宮の赤いあけらうんとう源系
乃近平あくと海のとく
業寂僧都

業寂僧都

あつたのちをもうとすれまふさばあすこゝ諸白

萬載狂歌集卷之九

哀傷歌

辭世

近松門丸寺

これ世さるゝどさるゝものなる様々花々やわづ

北窓為一蝶

まゝうらうらとくせいのまゝこのちやうとありとや月ようを墨の字
八百五半と朱

八百五十五

さるくと濱松風おちまれきて涙子あつむざんざの聲

おちよ

へとぞとや笑ひもあましくあらまきぬ名を
 中

并記

○ 四

古書

三

由緣齋

江寧

妙行

石首のちよ

山石之隣

人生変化のふと

あはれ川と云ふらん世をみれば涙もつゝあはれの歌

